琉球大学学術リポジトリ

琉球の古文書に見られる祭祀植物ダシチャ

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2023-05-08 キーワード (Ja): シマミサオノキ, 生育状況, ススキ, 古語, 琉球国文書 キーワード (En): Aidia canthioides Champ.ex Benth., Natural distribution and frequency, Miscanthus sinensis Anderss., Archaic words, Ryukyu Kingdom documents 作成者: 新里, 孝和, Chen, Bixia メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019767

琉球の古文書にみられる祭祀植物ダシチャ

新里孝和[1※]、陳　碧霞[2]
[1]国頭村文化財保存調査委員会、[2]琉球大学農学部亜熱帯地域農学科

The ritual plants recorded in ancient documents of Ryukyu Kingdom, dialect names of Dashicha

Takakazu SHINZATO [1※], Bixia CHEN [2]
[1]*Kunigami Village Cultural Properties Preservation Committee,*
[2]*Department of Subtropical Agro-Production Sciences, Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus*

キーワード：シマミサオノキ、生育状況、ススキ、古語、琉球国文書
Keywords：*Aidia canthioides* Champ.ex Benth., Natural distribution and frequency, *Miscanthus sinensis* Anderss., Archaic words, Ryukyu Kingdom documents
※Corresponding author (E-mail:shinri.takakazu@gmail.com)

ダシキヤはシマミサオノキか

了攬新森城碑文の「だしきやくぎついさしよわちへ」の“だしきゃ”について、伊波 [1)]は“硬い釘”、東恩納 [2)]は“楚木・ニンジン木”とし、その後、金城 [3)]はダシチャという植物で楚（ニンジンボク・人参木・牡荊）に類する堅靭な木、仲原 [4)]は 1957 年の論文にニンジン木（楚木）としながら 1961 年にはシマミサオノキと称する灌木としている．外間 [5)]は『おもろさうし』（上）第1巻「あおりいぇもりやあんじが節」17 にシマミサオノキとして、ダシキャで作られたダシカグサン（杖）は魔除けに使われ、これで作った釘を大地に打ち込んで魔除けにし、橋や堡塁の落成の祓いをしたとされ、同（下）[6)]第 13 巻「しよりゑとの節」763 には、ダシキャは聖木で第1巻同様にそれで作った釘を刺して魔除けにした、とある．

上江洲 [7)]は実録として、与那国島にはダシカグサンと称するシマミサオノキで作った杖があるという．シマミサオノキは弾力性に富んでいて、杖や漁師のモリの柄に貴重で、ダシカグサンは夜道での魔除けの杖である、またダシカ・クディと称して、シマミサオノキの木片 2 本を十字形（長さ約 20 ㎝）に結び、門や軒に吊るして魔除けにする．

東恩納 [2)]はダシキャを楚木・ニンジン木と考えたが、ニンジンボク・中国名牡荊（*Vitex negundo cannabifolia* Sieb. et Zucc.）は中国原産のクマツヅラ科の落葉低木で高さ 3m 位、日本ではときに庭に植えられる[8)]．中国で牡荊（mǔjīng ムジン）は乾華東各省および河北、湖南、四川、広東、広西、貴州に分布し、茎皮は紙や棉に、種子は鎮痛薬などに用いられる[9)]．

楚・ニンジンボクは、幹が群がって成長する木で、いばらの意を表し、また楚は鞭、杖、鞭打つ、しもと（刑罰の具）の意もあり、むかし、師は弟子を訓戒するのにその杖を用いたという [10)]．中国では古代に拷問の道具に使われたという話もあるらしい．あるいは、ダシキヤ・クギからクギ＝杖と解してダシキヤを中国の楚・杖の材すなわちニンジンボクとしたことが窺える．

ハマゴウ属（*Vitex*）は、高木種には硬い材を生産するのもあるが、灌木性のニンジンボクの用途は中国では樹皮は製紙原料に、茎葉―果実―根は薬用として栽培される [11)]、しかし杖用の記載はない．ニンジンボク・牡荊の材利用は杖というより、鞭のイメージが強いように思われる．

一方、シマミサオノキ（*Randia canthioides* Champ. ex Benth.）は奄美大島を北限地として徳之島、沖縄島、久米島、石垣島、西表島、与那国島、台湾、中国南部の山林に分布する [12,13)]．中国名は香楠である [14)]（図1）．天野 [15,16)]は、シマミサオノキの琉球列島各地の方言名を蒐集し、ウンシブ（奄美大島全域）、ウンシュブイ・ウンスグイ（奄美）、ウンソブ（奄美住用）、カナチャ（徳之島）、ジャシチャー（沖縄与那）、ダシカ（沖縄饒波・首里・琉球神道記、西表、与那国）、ダシカー（沖縄幸喜）、ダシキャ（沖縄おもろさうし・真珠湊碑、竹富）、ダシチャ（永良部、沖縄辺士名・世冨慶）、ダシチャー（沖縄世冨慶・久志）、ダスケ（石垣）、ダスケー（石垣登野城）、マーダスケ（石垣）、を記録している．その材は、張剛ですこぶる弾性に富み、把柄材・杭材・茅屋根の垂木・とくに杖材に賞用され、かつては漁具（ヤマ）に利用された [16)]．シマミサオノキはアデクとともに把柄材、また茅葺き屋根の針材の利用はよく知られている [17)]．日本の本州（和歌山県）、四国、九州に分布するミサオノキは操の木（牧野富太郎の命名）の意で、常緑樹林内に生える小高木、岩の間にあってもつねに青々として色が変わらないため、操の堅固なことにたとえたという [18)]．

図1　林内の果実をつけたシマミサオノキ
（国頭村与那 2019 年 8 月 5 日）

多和田 [19)]は、「古琉球の祭具」のダシチャクギの項で袋中の『琉球神道記』から、阿壇はアダン（*Pandanus tectorius* var. *Liukiuensis* Warb.）とし,タシカはダシチャでアカネ科シマミサオノキとしている．ダシチャの魔力は最初に実用から出たもので、実用から魔力が生じ、その杖やクギなどに魔力を認めるのは当然で、上江洲 [7)]と同じように与那国島のダシカクデを例に挙げている．天野 [16)]も「琉球開闢の神アマミキョ・シネリキョが初めて国作りの時ダシチャをうえて山を作った神話があり、又このダシチャ（シマミサオノキ）で天地の支柱にしたともある．」と付記している．ダシキヤの木で課題の１つになるのは、その和名とするシマミサオノキは自然分布域の山地林の中に多産するものではなく点在するということである [16)]．つまり、琉球列島の森林植生から袋中僧の「山ノ体トス」と唱えるほどに繁茂し優占種とはなっていない樹種なのである．

現存林分について、シマミサオノキの各地域の自然分布、林内の生育状況をみると、北限地の奄美大島では湯湾岳（標高 694.4m）の山頂付近の下層部 [20)]、神屋国有林・住用川周辺 [21)]に生育する．沖縄島北部の西銘岳（標高 420m）周辺 [22)]は林齢 50 年以上の林分（400 ㎡、全種数 60）（以下、被度・群度―直径㎝―樹

高 m―個体数の順に記す）で高・亜高木層（種数 29）＋―3.9～5.0―5.2～5.6―3 本（全数 174 本）、低木層（種数 13）+・2―1本（25 ㎡、全数 15 本）、草本層（種数 13）＋―1 本（5 ㎡、全数 35 本）、林齢 40～49 年生林分（400 ㎡、全種数 72）で低木層（種数 28）1・2－1.0～1.9―1.10～2.40―4 本（25 ㎡、全数 87 本）、林齢 30～39 年生林分（100 ㎡、全種数 34）で低木層（種数 16）1.2、林齢 20～29 年生林分（100 ㎡、種数 68）で低木層（種数 25）1・2－0.9－1.30－1 本（25 ㎡、全数 76 本）、林齢 20 年生以下の林分（100 ㎡、種数 69）で低木層（種数 22）1・2－0.8～1.4―1.20～2.29―2 本（12.5 ㎡、全数 80 本）が生育する．

その他、シマミサオノキは伊湯岳（標高 446.2m）～玉辻山（標高 288.9m）地域[23]の標高 280m 付近林齢 40～49 年生林分の高木層（400 ㎡、全数 124 本）で直径 6.5 ㎝樹高 7.2m―2 本中 1 本あり、および照首山（標高 395.2m）～クエンチヂ（標高 390m）地域[24]、北部山地東側地域[25]の標高 370m 付近林齢 50 年生以上林分の高木層（400 ㎡、全数 135 本）で直径 5.5 ㎝樹高 8.3m―2 本中 1 本あり、また北部地域（国頭村・大宜味村・東村）にわたり、沖縄島北部山地域のシマミサオノキの生育状況は優占度・群度―直径―樹高―個体数ともほぼ同じである．

八重山地域の石垣島於茂登岳（標高 526m）[26]周辺では、シマミサオノキの生育状況は標高 500m のイスノキ―オニヘゴ群落の低木層（2m 高）で＋、標高 170～280m のケナガエサカキ―スダジイ（イタジイ）群集の低木層（3～4m）で＋～1・2、西表島のウラジロアカメガシワ―コウモリシダ群落[27]の草本層＋、スダジイ（イタジイ）―フクギ群落[28]の標高 30m の亜高木層（高さ 5m）で＋・2，標高 40m の低木層（2m）で 1・2，標高 50m の低木層で＋、標高 70m の低木層で＋、標高 100m の草本層で＋、標高 210m の低木層（2.5m）で 1・2、古見岳[29]のヤマビワソウ―ホソバタブ群集の標高 450m の草本層で＋、ケナガエサカキ―スダジイ（イタジイ）群集の標高 100～345m の低木層（高さ 2～4m）で＋～1・2、草本層＋、標高 60～200m の亜高木層（高さ 8m）で＋、低木層（高さ 2.5～4m）＋～1＋2、草本層＋、となっている．

シマミサオノキを資源植物[30]からみると、幹は杭材・茅屋根の垂木・杖材・杷材・漁具に利用し、八重山ではイノシシのハネ罠猟のはね木として、跳ね上げる力・耐久性・折れ難く・曲げに強いので最もよく、ニンギョウ（はね木が跳ね上げる役目をする）にも腐れ難くシロアリ害にも強いのでよく用いられる．シマミサオノキの生育状況は、400 ㎡当り直径 3 ㎝以上の立木が、石垣島於茂登岳で樹高 10m以下のものが7本（全本数 86 本）、西表島浦内川で樹高5m 以下のものが4本（全本数 106 本）、仲良川で樹高 5m以下のものが3本（全本数 127 本）、沖縄島国頭村与那で 6 調査地の中層から下層に立木本数 0～16 本（全本数 161～302 本）となっている．

このように、沖縄の山林におけるシマミサオノキの生育状況は、凡そ林冠下の亜高木層から低木層に生育して直径 5 ㎝内外樹高 8m以下くらいのものが多いが、課題の一としたその立木本数は各林地ともとても少ない．さらに課題となるのは、シマミサオノキの生育は非石灰岩地の山地なので、沖縄の首里を中心とする、低地帯で琉球石灰岩地・泥灰岩土壌（クチャ・ジャーガル）のアルカリ性土壌の南部地域や小低島の林地には自然分布しない．従って、シマミサオノキの木材は貴重で、祭祀植物に利用するには王都から生育場所が遠く、多量に頻繁に採取するのも容易でないと思量される．

笹森[31]によると、明治中期に「ダシチャー」の木が国頭地方の深山にあり、木理堅緻、強勁で、ステッキにして携帯する、とあるので、その頃から山原でダシチャーは普通にステッキ＝杖にして用いられていたと思われる．山原地域のダシチャーの材の性質と杖利用の客観的見地から、樹種はシマミサオノキに違いないだろう．ただ、国頭地方の用材・薪炭材として杉・楠・梅檀・樫木など 50 余種の材が挙げられているが、その中にダシチャーはないので、一般の用材には扱われていなかったと思われる．古文書のダシキヤはダシキャ＝ダシチャーで、ダシキヤすなわち杖・針の用語にしたことも考えられる．

古文書のダシキヤについて、金城[3]は東恩納説を受け入れて漢名「楚」からニンジンボクとしているが、仲原[4]は当初のニンジン木（1953～1959 年）からおそらく久米島旧記を参考にして灌木性シマミサオノキ（『沖縄文化』1961 年）と記述している．多和田[19]（1963 年（「古琉球の祭具」沖縄タイムス）は、ダシチャの木は国頭や西表に生育する小喬木で材は堅く質は緻密で弾力性が強く、古来利用されてきた貴重材で、槍や銛や農具などの柄、杖・棒・杭・建築用の木針、祭具など多様な利用法があったといい、そしてダシキャ（ダシチャ）はシマミサオノキで、宮良當壯説から魔除け・タブー用に使われるので八重山方言でウアダスキ（アダーシギー、ウダーシギー）の「ア」が抜けてダスキ、ダスカ、ダシカ、ダシチャとなったとし、対してナガミボチョウジはイン（犬）ダスキ、ミズ（水）ダスケ、ビタスカで、ウ（雄）タスカと称するのはダシチャの紛い物という意であろう、とする．両種とも共通に対生葉序をなす．

山地林には、対生葉序をなしシマミサオノキと同じように小高木性のフトモモ科（Myrtaceae）のアデク（*Syzygium buxifolium* Hook. et Arn.）がある．多和田[19]は、前述したように国頭村安田では魔除けにアザカを植える慣習が昔あったが、その屋敷の門口の道路面に穴を掘り、シャコガイの腹の中にあらかじめダシチャクギという木片を入れ、貝の合わせ口を天に向けて埋める、その木片には大抵アデクが使われた、という．また八重山地域の部落桴海・仲筋・伊原間・平久保・川平の祭祀「まゆん・がなし」にはアデク（方言名ダディフ木）を神杖・魔除けの杖として、6尺棒に使う、と具体例を挙げている（「はぶいの植物学」えとのす第1号 1974 年）．同様に湧上[32]も、マユンガナシはダディフ（アデク）の木かガジマルでこさえた 6 尺ほどの杖をついて出現すると記す．アデク[16]は、琉球列島各島の山地に分布し、方言名はアディク（沖縄・伊是名・伊江・久米）、アヂク（沖縄辺士名）、アリク（沖縄宇茂佐、渡嘉敷）、アルク（渡嘉敷）、アディフ（石垣・竹富）、アヂュキ（西表）、アヂカ（与那国）などと称し、材質は非常に堅硬で強度が大で、把柄材によい．またシマミサオノキと同様に茅葺きの針に使う[17]．アデクもシマミサオノキ、ボチョウジ属と同様に対生葉序である．

沖縄島北部地域の林齢及び毎木調査[22,23,24,25,30]から概観すると、アデクはシマミサオノキに比べて、山地のやや低いところまで生育し、出現頻度はやや高く、直径樹高とも大きく、材の採集もやや容易である．ダシチャの材は古来あるいは穴屋の時代から、非石灰岩地で高島地形の沖縄島北部地域や八重山地域では強度を要する部材や継手（釘、楔など）、自然物採取時代の狩猟漁猟などの槍や柄、棒や杖、祭具などの利用の可能性があるとしたら、比較的村落に近い場所に生育するアデクが大いに使われたと思われる．

山原国頭では、家や船の落成の時に神々を招じてそれを祭るとき、神々が帰った後に屋敷内を捜すと神の杖ダシキヤ（木名）の跡がありありと見られるが、翌日までには全く消えているという[33]．大宜味村塩屋では、帆船を新造してその進水式の前日の夜半になると神々が現れ、船を巡りつつ釘の打ち方の拙い所に神杖で標を付けるという[34]．これらは来訪神・大工神の性格を持ち、その神杖はダシキャの和名シマミサオノキで「これで作った釘や杭は建物を堅固にする呪力をもつといわれ、ダシチャ杖はやはり大工の棟梁を象徴する棒であったのだろう」とする[35]．一方、奄美群島では、アシャゲやトネヤの屋根のカヤ葺きかえの時など、神山（オボツ山、テラ山、森山）から鉦の音を鳴らして神が下り、定規や棒などをもって長さを測ったり悪祓いなどをする．加計呂麻島西阿室では、路上に坐り頭を下げている部落の人々が、少しでも頭を上げると神役が手に持ったアザハ（ススキ）で叩くという[35]．だが、いずれの村落でも、神々の持つ棒やダシチャ杖またその杖をシマミサオノキとする実態は分からない．神々の持つ杖・棒・呪具は、山原国頭地方ではダシキャであるが、奄美群島ではアザハ―ススキであり、ダシキャーアザハ―ススキの語で混乱がみられるようにあ

る.

石垣島の「まゆん・がなし」では神衣に仮面をかけ、頂にススキの茎葉を3本さし、神杖・六尺棒にアデク(図2)が用いられ、「アカマタ・クロマタ」では、西表島古見・石垣市宮良部落は神衣に頭部がススキ、オオタニワタリ(ゴウシュウタニワタリ:古見)、体につる草(カニクサ)を着ける. 宮古島の「ウヤガン祭り」の神杖は島尻部落がグミモドキ(葉付きの枝を手に持つ)、狩俣部落がリュウキュウガキの葉付きの 2m 大の枝を使う(以上多和田 [19];「ハブイの具体例」). その中で、宮古・八重山群島でも神杖にシマミサオノキは見られない. 宮古島砂川のナーバイ祭祀(クイチャーも同じ)は、女性たちがダキフ(ダンチク)を手にし、男性たちは利用できる木であれば何でも手にして使うという(本永 清:私信). 男性たちの手にする木は国頭村安田のシヌグ [36]の男神と同じである.

図2 アデクの立木
(ポール左側;通直の木、国頭村与那 2021 年 11 月)

祭具の棒について、久高島は旧暦 11 月 13 日の男の祭り"アミドシ祭り"で2人のソーレーガナシ(竿取神)[37]の持つソーレーガナシの棒(長さ約 4m)はイヌマキかスギである. 古宇利島ウンジャミはノロや女神人の持つヌミ(弓)は 2.5m 位のダシチャ木(シマミサオノキ)[38,39]とあり、古宇利島では戦前は芋と山原の薪とを交換したというから、ウンジャミの弓のダシチャ木を入手することが出来たと思われる. ただ、ヌミはダシキャー・ダシカ・ダンチャ木(シマミサオの木)と称されるが、樫 [40]あるいは樫材が多い [41]とされ、筆者の一人新里 [42]の聞き取りでは現在は南方材ラワン・アピトンが使われ、古家屋を建て替える際の樫材(おそらくオキナワウラジロガシ)もあり、材料に決まりはないともいう [40].

ダシキャ・ダシチャの琉球方言名を検討してみると、シマミサオノキは沖縄・八重山地域は同系統のようで、奄美地域は沖永良部でダシチャ・徳之島でカナチャとするが他の地域ではダシキャの語音が感じられずウンシブ・ウンシュブイ・ウンスグイ・ウンソブである [43].

石垣島では、多和田 [19]も述べているようにシマミサオノキにダスケの名があるが、さらにマーダスケがあり、これはおそらくボチョウジのインダスケ・ミズダスケー(石垣)・ウシヌシタキ(西表)・ビキタヒカ(与那国)・ビタスケ(波照間)に対するものであろう. また多和田 [19]は、宮良当壮がダシキャは魔除け・タブー用に使われるからウアダスキ(アダーシギー・ウダーシギー)のアが抜けダスキ・ダスカ・ダシカ・ダシチャになったと唱えたことから、八重山方言はアザカ(ナガミボチョウジ)に似て非なることに因むもの、と述べている. すなわち、アダーシギー・ウダーシギーに比べてアザカのナガミボチョウジは見映えが乏しいという意になるだろう. 植物名のイン(犬)は、役に立たない・品がない・本物ではない・粗剛・材質が劣る・などの意がある[8]. 宮良・多和田説から推察すると、アザカの語が出る以前にウアダスキすなわちダシチャ・ダシキャの語があったことになるだろう.

シマミサオノキとナガミボチョウジは共にアカネ科に属するが、2樹種は樹高、直径など大きさ、また実や葉の形など、形態が明らかに異なり、材もシマミサオノキは把柄材など貴重であるがボチョウジは用材としてほぼ役立たない. 八重山地域ではシマミサオノキが与那国島で魔除けなどに用いられる他に、両樹種とも祭具の利用は見当たらない. 因って、八重山地域で人の暮らしに触れないボチョウジ属のインダスケ名はダスケ・マーダスケと対比して名付けるのは相応しくない気がする. マーダスケの"マー"は、マオ(真麻)・スギ(古名マキ)・マダケ(真竹)[8]から真の意で、マーダスケは本物のダスケ・ダシチャということになるだろう. インダスケは、沖縄地域で称するダシチャ=シマミサオノキに対する反語と捉えることもできよう.

あるいは、八重山のウアダスキすなわちダスケ・ダシチャは、シマミサオノキではなく、祭祀植物の条件の一とする村落の生活の場に近く、容易に採取することのできる別の植物種ではないか、とも推察される. さらに、宮古のフォークロアを記録したネフスキー[44]の『25 世の終わりのうた』の「dasïk' agi:ŋ」の訳は"だすぃきゃぎーん"と読み"現代訳でダシキャ木(杖)に"とするが、宮古言葉では"支えに"とされ、本永 清(談)も"支え・助けの木"の意とする. 事実、琉球石灰岩地の宮古島にはシマミサオノキは自然分布しないので、歌謡はダシキャをシマミサオノキの杖(グサン)とするより、ネフスキーの解釈のように下記が適訳であろう(本永;教示).

みゃーく とぅユまい (長生きして)宮古が富み栄えるのを
すぃま とぅユまい 島(村)が富み栄えるのを
みーぶすぃむぬいー みたいものだ.
なみうとぅざゆー 並み居る 親戚の者たちよ.

ぐしゃんぎーん 杖の木(長杖)に
うからまいきゃ 寄りかかるまで
だすぃきゃぎーん 助ける木(支える木)に
うからまいきゃ 寄りかかるまで
うとぅむ すーらゆ みーぶすぃむぬいー 一緒に長生きしようよ

果たして、古代の民人が魔除け・厄除けまた守護のために"立て""さし""とめて"いた拝みの堅い植物は、風土を反映して歴史の推移とともに変化し、多様化してきたと考えられよう.

植物名には、元の言葉に後の時代に接頭語がついたと思われるものがある. 例えば、ツバキは野生のものを育種して栽培普及したものに元のツバキそのものが命名され、後世に野生のものには藪・山を接頭語にしてヤブツバキ・ヤマツバキとした経緯がみられる[8,45]. マーダスケは、アザハのボチョウジ属が何らかの経由で、その一つに王府編纂の『おもろさうし』の普及で祭祀植物語として八重山地方に入り、それを受けて元々神聖な植物であるダシチャにマーなどを付け、不用なボチョウジ・ナガミボチョウジをインダスケにした可能性も考えられよう.

奄美地域のシマミサオノキの方言名ウンシブ・ウンシュブイ・ウンスグイ・ウンソブで、"シブ・シュブイ・スグイ・ソブ"は同系列になり、"ウン"は共通の接頭語と思われる. ウンの付く植物名には [43]、ウン(サトイモ、宇検)、ウンガジュマル(ネズミモチ、与論)、ウンジャネ(ショウベンノキ、伊仙)、ウンジャンカジラ(テリハカニクサ、与論)、ウンジャマヤクサ(カタヒバ、大和)、ウンチェーバー(ヨウサイ、与論)、ウンナイ(ツルソバ、喜界)、ウンナシグサ(シイノキカズラ、沖永良部)、ウンニヤ(シマニシキソウ、伊仙)、ウンバクサ(オオバコ、奄美)、ウンファー(カラムシ、喜界)、ウンマーミ(ハマナタマメ、与論)などがある. サトイモのウンは芋、ウンマーミは海・浜の豆の意であろう. ウンシブ、ウンガジュマル、ウンジャンカジラなどの"ウン"は、あるいは八重山地域の接頭語"ア""ウ""マー"と同類の言語

であろうか.

もう一考すると、八重山地方のボチョウジ属の方言名インダスケからアザカ・アダカ名以前にダスケ・ダシチャの名があることになり、また既述のように(多和田 [19]「古琉球の祭具」)国頭村安田では門口に魔除けのアザカを植える前に、シャコガイの腹の中にダシチャクギの木片を入れて埋めるが、その木片にアデクを使うという. つまり、ダシチャの名は堅い木質をもち霊威のある祭具の広義の樹種名ではなかっただろうか. 現在の方言名ダシカの和名とするシマミサオノキは奄美群島以外の琉球各島の方言名は系統的に同じである. これはおそらく、オモロの王府解釈により、古来、各地域で民具(屋根葺きなど)に使われていたシマミサオノキの性質と合致するので、ダシカ名が当てられ普及したことも考えられよう. ダシチャ・ダシカは、穴屋を葺く時代から、堅く、細い棒状のものに供する建築や細工や生活用のクジ・杭・棒・杖などに加工して使われたアデク、オキナワウラジロガシ、シマミサオノキなどに総称されていたものが、国家祭祀以後に信仰的祭具の語句に転用され、とくに杖・釘材として重用されていた樹種シマミサオノキに特定されたことが推考されよう.

アザカ・ダシキヤの出典書の編集年をみると、『眞玉湊碑文』が嘉靖元年(1522 年－尚真王)[4]、『了攬新森城碑文』が明嘉靖 33 年(1554 年－尚清王)[1]、『おもろさうし』の第一巻が 1531 年(尚清王)、第十三巻が 1623 年(尚豊王)であるが、実際には 1477 年尚真王代の中央集権断行の際に各地のオモロを集めて冊と為したという [6]、『琉球神道記』[46]が 1605 年頃(尚寧王)である. 『琉球神道記』は袋中僧(浄土宗)が慶長 8 年(1603 年)に来琉、3 年滞在 [47]中に著したものである.

15 世紀終期から 17 世紀初めにかけて、琉球の陸の交通はきわめて不便で主として船に頼っていたのであろう時代に、沖縄島では山原の深山にのみ点在する、すなわち山林で目にすることの少ないシマミサオノキを採取しダシキヤと銘打って祭祀植物に用いるほど重要なものであっただろうか、ましてや首里王府および琉球開闢の島とする久高島や国家祭場である斎場御嶽周辺を含めうるま市 5 島など琉球石灰岩地の島々に生育しないその樹種を殖やしてヤマと為すものに唱えたとは考え難い. さらに疑義を抱くのは、明治期には国頭地方の木材にダシチャ名でシマミサオノキが杖に用いられているものの、各地の祭祀植物にダシチャ(シマミサオノキ)がほとんど出てくることはない. シマミサオノキとボチョウジ属が生育する石垣島・西表島地方もほぼ同じ状況である.

思い巡らすのは、久高島のイザイホー祭祀にナンチュがトウツルモドキのハブイに挿すナガミボチョウジをアザハと称することである [48]. 方言名アザハの元はススキで、塩屋湾ウンガミの女神人がもつ枝葉の束はススキ(グシチ・ジシキ・シバ)とクスノハカエデ(マンモク・セッケンバー)であるが、その束にはアザハ名がついている [42]. 「ダシキヤ」は、古文書の解釈でダシチャ＝シマミサオノキとされるが、アザハ＝ススキをボチョウジ属とするようにダシキヤもススキの方言名グシキ・グシチ・グシチャーの転訛あるいは誤転用か、また宮古の『25 世の終わりのうた』にみるように杖→グサン→ダシチャ→『オモロ』のダシキヤの流れもありそうで、ダシキヤ―アザハの 2 語は対語で祭祀の代表的な植物であるススキの可能性が考えられないだろうか.

課題とするのは、沖縄島北部～中南部および周辺の島々のシヌグ・ウンジャミ祭祀など、現在の主要祭事をみるとシマミサオノキを祭具ダシチャとして使っている地方は見当たらないことである. シマミサオノキを魔除けに使っているのは与那国島で [7]、ヤマ名にアザカ森やラーサー山(ラシチャ木の森)があるのは久米島である [49]. それらの経緯は調べる必要があるが、与那国島と久米島ではオモロの編集の後に祭具としてダシチャ(シマミサオノキ)が使わるようになったのか、また交易上および隣国として、与那国島は台湾地域、久米島は日本や中国や韓国など [50]と関連があるのか、見極める必要があろう.

引用文献

1) 伊波普猷.2017.「琉球に於ける倭寇の史料」(『古琉球』《外間守善;校訂》)(第 9 刷),株式会社岩波書店,東京,pp.144-156.

2) 東恩納寛淳.1964.「眞珠湊碑」(『南島風土記－沖縄・奄美大島地名辞典―』)(初版 1950 年),沖縄郷土文化研究会,沖縄,pp.285-287.

3) 金城朝永.1974.「金城朝永全集　下巻　民俗・歴史篇」,沖縄タイムス社,沖縄, pp.252-278.

4) 仲原善忠.1977.「仲原善忠全集　第二巻　文学篇」,沖縄タイムス社,沖縄, pp.28-54,66-72,164-178,432-438,498-504.

5) 外間守善.2017.「おもろさうし(上)」,株式会社岩波書店,東京, pp.23-24.

6) 外間守善.2017.「おもろさうし(下)」,株式会社岩波書店,東京, p.19.

7) 上江洲均.1982.「沖縄の暮らしと民具」(考古民俗叢書〈19〉)年,慶友社,東京,pp.149-191.

8) 牧野富太郎.1968.「新日本植物圖鑑」,(第 17 刷),株式会社北隆館,東京,pp.1060,392,362.

9) 中国科学院植物研究所.1974.「中国高等植物図鑑,第三冊」,科学出版社,中国,p.595.

10) 小川環樹・西田太一郎・赤塚忠.1988.「角川新字源」,株式会社角川書店,東京,p.516.

11) 村田源・堀田満・新田あや.1991.「*Vitex* L.ハマゴウ属」(堀田満・代表『世界有用植物事典』),株式会社平凡社,東京,pp.1099-1100.

12) 初島住彦.1975.「琉球植物誌(追加・訂正版)」,沖縄生物教育研究会, 沖縄,p.579.

13) 初島住彦・天野鉄夫.1994.「琉球植物目録」,沖縄生物学会,沖縄,p.215.

14) 中国科学院植物研究所.1980.「中国高等植物図鑑,第四冊」,科学出版社,中国, p.235.

15) 天野鉄夫.1979.「琉球列島植物方言集」,新星図書出版,沖縄,pp.85-86,111, 148-149,178-179, 198.

16) 天野鉄夫「琉球列島有用樹木誌」1982,琉球列島有用樹木誌刊行会,沖縄,pp.177-178.

17) 新里孝和・木下義宜.2012.「国頭村奥の植物方言」,名護博物館紀要「あじまぁ」・16,名護博物館,沖縄, pp.37-63.

18) 福岡誠行・堀田　満.1991.「*Randia* L.ミサオノキ属」(堀田　満・代表『世界有用植物事典』),株式会社平凡社,東京,p.888.

19) 多和田真淳.1980.「古希記念　多和田真淳選集(考古・民俗・歴史・工芸)篇,二　民俗篇」(古希記念多和田真淳選集刊行会《沖縄県立博物館気付》),pp.165－186. 「古琉球の祭具＝アザカガネとダシチャクギ」(『沖縄タイムス』1963 年 11 月 3 日～14 日),「はぶいの植物学」(『えとのす』第 1 号 1974 年),沖縄,pp.187-198.

20) 内藤喬・新敏夫・大野照好.1956.「奄美大島の植物　Ⅰ」,南方産業科学研究所報告,第 1 巻第 3 号,鹿児島, pp.48,52.

21) 島袋敬一・新城和治・宮城康一・横田昌嗣.1989.「奄美大島神屋国有林・住用川周辺植物相」(南西諸島における野生生物の種の保存に不可欠な諸条件に関する研究―昭和 63 年度奄美大島調査報告書),環境庁自然保護局, pp. 39,57.

22) 宮城康一・新城和治.1989.「沖縄島北部西銘岳地域における林齢による植生の比較研究」(特殊鳥類等生息環境調査Ⅱ),沖縄県環境保健部自然保護課,沖縄, pp.1～95.

23) 新城和治・宮城康一・新島義龍.1991.「沖縄島北部玉辻山地域における林齢による植生の比較研究」(特殊鳥類等生息環境調査Ⅳ　中間報告書),沖縄県環境保健部自然保護課,沖縄,pp.1～67.

24) 宮城康一・新城和治.1990.「沖縄島北部照首山地域における

林齢による植生の比較研究」(特殊鳥類等生息環境調査Ⅲ)沖縄県環境保健部自然保護課,沖縄, pp.1～109.
25) 新城和治・新島義龍・宮城朝章・島袋曠・翁長文子・兼本正.1992.「沖縄島北部脊梁山地東側地域における林齢による植生の比較研究」(特殊鳥類等生息環境調査Ⅴ),沖縄県環境保健部自然保護課,沖縄, pp.1－122.
26) 新納義馬.1981.「於茂登岳周辺の植生概観」(沖縄県自然環境保全地域・指定候補地学術調査報告,於茂登岳及びその周辺地域),沖縄自然研究会・沖縄県,沖縄,pp.55-114.
27) 宮城康一・日越国昭・新納義馬・新城和治・新島義龍・宮城朝章・島袋 曠・天願敏男.1985.「西表島仲間川天然保護区域の植生」(西表島等天然記念物緊急調査Ⅱ・西表島天然記念物緊急調査報告書Ⅱ,植物),沖縄県教育委員会,沖縄, pp.1-20.
28) 新城和治・宮城康一・新島義龍・宮城朝章・島袋曠・日越国昭・天願敏男・新納義馬.1985.「西表島南海岸並びに海崖の植生」(西表島等天然記念物緊急調査Ⅱ・西表島天然記念物緊急調査報告書Ⅱ,植物)沖縄県教育委員会,沖縄,pp.47～71.
29) 島袋曠・宮城朝章・新城和治・宮城康一・天願敏男・日越国昭.1985.「西表島古見岳の植生」(西表島等天然記念物緊急調査Ⅱ・西表島天然記念物緊急調査報告書Ⅱ,植物)沖縄県教育委員会,沖縄,pp.73～107.
30) 新本光孝・新里孝和・安里練雄・石垣長健.2007.「亜熱帯沖縄における天然林の資源植物学的研究」(平成 15 年度～平成 18 年度科学研究費補助金)琉球大学熱帯生物圏研究センター,沖縄,pp.1～210.
31) 笹森儀助・東喜望:校注.1982.「南嶋探験　一名琉球漫遊記Ⅰ」(明治 27 年識,1894 年),株式会社平凡社,東京,pp.94,122.
32) 湧上元雄.1973.「南島の訪問者儀礼と仮面信仰」(月刊青い海,第 3 巻第 6 号),株式会社青い海出版社,沖縄, pp.98-106.
33) 佐喜眞興英.1922.「南島説話」,郷土研究社,東京,p.76.
34) 島袋源七.1929.「山原の土俗」,郷土研究社,東京,pp.133-134.
35) 小野重朗.1977.「神々の原郷―南島の基層文化―」,財団法人法政大学出版会,東京. pp.217-241,143-144,64-71.
36)新里孝和・芝正巳.2014.「沖縄・国頭村安田シヌグの祭祀植物ゴンズイ(Ⅰ)」.琉球大学農学部学術報告, 61: 55-66,
37) 当間一郎・友利安徳.1982.「神々のふるさと久高島」,沖縄公論社,沖縄, p.262.
38) 平敷令治.1990.「沖縄の祭祀と信仰」,第一書房,東京,p.181.
39) 今帰仁村史編纂委員会.1975.「今帰仁村史」,今帰仁村役場,沖縄,pp.177-178,236.
40) 沖縄県今帰仁村歴史文化センター.2001.「なきじん研究 10－新城徳祐氏資料―調査記録ノートー」,今帰仁村教育委員会-今帰仁村歴史文化センター,沖縄, p.31.
41) 大城學.1991.「古宇利島の祭場と儀礼」(県立博物館総合調査報告書Ⅷ－古宇利島－),沖縄県立博物館,沖縄,p.31.
42) 新里孝和・陳碧霞・芝正巳.2019.「沖縄,古宇利島と塩屋湾のウンジャミの祭祀植物」. 琉球大学農学部学術報告, 66:51-63.
43) 大野隼人.1995.「奄美群島植物方言集」,財団法人奄美文化財団,鹿児島, pp.8-10,34,75,88.
44) ネフスキー.1998.「宮古のフォークロア」(ニコライ・A・ネフスキー著,リヂア・グロムコフスカヤ編)砂子屋書房,東京,pp.262-265.
45) 北村四郎・村田源.1989.「原色日本植物図鑑・木本編Ⅱ」株式会社保育社,東京,pp.155-156.
46) 弁蓮社袋中・原田禹雄訳注.2001.「琉球神道記」,榕樹書林,沖縄,pp.236-403.
47) 長谷部八郎.2020.「第七節　外来宗教　一,仏教」(『沖縄県史各論編　民俗』),沖縄県教育委員会,p476,沖縄
48) 新里孝和・陳碧霞・西銘政秀.2020.「沖縄・久高島イザイホーの祭祀植物」.琉球大学農学部学術報告, 67:pp.7-13.
49) 仲村昌尚.1992.「久米島の地名と民俗」,「久米島の地名と民俗」刊行委員会,沖縄,pp.211,291,461-462.
50) 新屋敷幸繁.1974.「久米島の歴史と文化」(沖縄自然研究会調査報告第 1 号「久米島県立自然公園候補地学術調査報告」)沖縄自然研究会,沖縄,pp.99-106.